

園番号 703

令和6年度 奈良市立左京こども園

研究実践概要

園長名

一ノ瀬 万起

全園児数

102名

1. 研究主題

しなやかな心と体を育む保育をめざして
～子どものもつ力を引き出す保育者の関わり～

2. 研究年度

2年度

3. 研究主題設定理由

予測困難な未来を生きる子ども達が、たくましさやあきらめない気持ちをもち立ち向かっていく力や、しなやかに状況の変化に対応していく力を身につけ、幸せに生きていってほしいと願い、この主題を設定した。今年度は、保育者の在り方に焦点を当て、本来子どもがもっている力を引き出す援助について探っていきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子ども達が様々なことに興味をもち肯定的に取り組んだり、あきらめずに挑戦したりし、自信をもって自分らしく生きる力をもった子どもを育む。

②研究の重点

- ・自身の保育を振り返るだけでなく、今年度は職員間での話し合いの場を多くもち、他の保育者の考えや意見に触れ、多面的に子どもを見る力や同僚性を高める。
- ・子どもが、自分への自信と他者への信頼感を育み、安心して失敗できる関係性の構築を図る。
- ・子どものやってみようという気持ちを育むための保育者の関わりについて探り、専門性を高める。今年度は子どもの心の動きに着目する。

③活動の方法

1, ハートの日

保育の一場面の写真を出し合い、担任保育者の思いや見取り、他の保育者の気付きや見取りなどを出し合い、保育について話し合う。2か月に一度行う。

【事例1】3歳児 5月『下までいくかな』 子どもの心の動き 保育者の援助

斜めに立てかけたトイにガチャガチャのカプセルやボールを転がしていたA児。近くにあったお椀やおたまをトイに置いたが転がらなかったため、保育者が「下までいかないね」と声をかけると、A児は手で押して下まで滑らせようとしていた。しばらく続けていたが辺りを見回して、洗面器に水を汲んできて流すとおたまが勢いよく下まで滑ったので「いった！」と笑顔で保育者の顔を見た。「下まで流れていったね」と一緒に喜

んでいると、今度はトイに砂を敷き詰めて水で流し、砂が流れていく様子をじっと見ていた。「すごい！砂が全部なくなったね」と声をかけるとA児の横でずっと見ていたB児も「すごい！」と言って笑ったので、保育者が「おもしろそうだね。やってみる？」と誘うと、B児もトイに砂やおたま、スコップ、カップなどを置いては水で流すことを繰り返し楽しんでた。



〈担任の思い・見取り〉

- ・ A児は下まで滑らせるために手を使うだけではなく、他に方法を考え洗面器を持ってきた。それまでの水流しの経験があったからこそだと感じた。
- ・ B児はずっとA児の近くにいって様子を見ていた。A児の楽しんでいる様子が共有できればいいな。あまり関わりのなかった2人が一緒に遊ぶきっかけをつくりたい。

〈他の保育者の気付き・見取り〉

- ・ 毎日トイを立てかけて転がし遊びの環境づくりをしていたことで、継続して遊ぶことができる。
- ・ いろいろな素材や用具が近くにあったことで、A児は転がすものや流すものを自ら探し、転がしたり流したり、繰り返し楽しむことができた。
- ・ 写真からB児はお椀や型抜きを持って、A児がしていることを真剣な表情で横から覗き込んでいる。一緒にしようとしてるのかな？見ているだけなのかな？と職員間でいろいろな見方ができた。
- ・ 担任がB児を誘いかけたことで、それまであまり関わりのなかった2人がいろいろなものを水で流すことを一緒に楽しんだ。

《反省・評価》

1枚の写真を見て話し合うことで、職員間でいろいろな見方ができた。また遊びの様子や担任の思いを聞きながら話し合いをしたことで、3歳児の遊びの様子や子どもの姿を共有しやすかった。この時期、何に興味をもち、何を楽しんでいるのかなど、いろいろな視点で見取ることで、担任自身が新たな気付きをもつことができたり、見通しをもって環境の準備をしたりすることができ、この後も子ども達が積極的に水に関わる姿につながった。

【事例2】5歳児 9月『絶対、勝ちたい』 子どもの心の動き 保育者の援助

夏休み明け、運動会のトラックが園庭に出来上がると、さっそく遊びの中で、リレーが始まった。「先生、リレー対決したい」と声があり、クラス対抗リレーをすることになった。一回目の対決では、負けてしまい「悔しい」「絶対、勝ちたい」と友達同士で話す姿があった。この悔しい気持ちを次につなげていけるように「どうやったら勝てるか、みんなで考えよう！」と子ども達に提案し、部屋に戻って作戦会議をした。「よそ見しない」「腕をたくさんふる」「真剣な顔で走る」「走るのが速い人は、1番とアンカーにする」などの意見が出た。子ども達が互いに意見を出し合えるように、子どもの意見をボードに書いたり、言葉を補って共有したり、考えられるように問いかけたりした。保育者からも一人の力ではなく、みんなでバトンをつないでいくことが大切だということを伝えた。話し合いで出た



ことを子ども達と共有していくことで、2回目の対決では勝つことができた。「この前、よそ見しないってみんなで決めたから、バトンもずっと見てたし、落とさなかった」「みんな真剣な顔で走ってたから、今日はみんな速かった」と、その日の対決を満足気に振り返っていた。その後も友達と誘い合ってリレーをして遊ぶ姿があった。

〈担任の思い・見取り〉

- ・子ども達の悔しい気持ちを受け止め、勝つためにどうしたらいいか子ども達に考えてほしい。
- ・最後までバトンをつなぐことを大切にしながら、みんなで気持ちを一つに取り組んでほしい。

〈他の保育者の気付き・見取り〉

- ・みんなの場で自分の思いを発信することが苦手な子の声もひろっていけるようにするといい。
- ・走ることが苦手な子も、その子が輝ける場面や自信がもてる場面があれば、さらに一人一人の自信につながっていく。そこに着目していくことが大切である。
- ・保育者は、最後までバトンをつなぐことの大切さを伝えながら、順位や速さだけではない、みんなで考えられる環境をつくっていくことが大切である。

《反省・評価》

ハートの日の話し合いを受けて以降、着目点やねらいをより意識して振り返りの場をもつことができた。また、他の保育者がリレーの様子を見て、保育者の援助の仕方についてや子ども達へアドバイス、応援をすることが増えた。様々な視点で見えていくことで、子ども達の意欲が増し、いろいろな方法で練習をしたり互いに励まし合ったりしながら、リレーに取り組む姿につながった。

子ども達と話し合いを重ねる中で、保育者と子ども達の「勝ちたい」という思いがさらに強くなり、気持ちを一つに最後までバトンをつないで走り切ることの大切さを感じながら取り組むことができた。

2. 園内研究会

各学年1回ずつ園内研修を行う。保育を見て実際に子どもの様子や、担任の援助、環境構成を見て気付いたことを出し合い、翌日からの保育に活かせるようにする。

【事例3】4歳児 10月『わかった!』 子どもの心の動き 保育者の援助

ケースの穴に固定させたホースをスタートにして、ドングリ転がしが始まった。しかし、ドングリはホースの先につなげたトイの途中で止まってしまう。「止まっちゃったね、何でかな」と保育者が問いかけると、A児が「ここが平らやからちゃう。もうちょっと斜めにしたらいいんちゃう？」と気付いたことを話す。その言葉を聞いたB児が「わかった! ケース持ってくる!」と言って取りに行った。傾斜がつくようにビールケースを積み重ねると、ドングリは勢いよくトイの先まで転がった。「やったー! 転がったね」と保育者が声を掛けると「うん!」とにっこり頷く。嬉しそうに何度も転がすうちに「ここにトンネルつけて長くしたらいいんちゃう」等といろいろなアイデアを出し合いながらコースづくりを楽しんだ。



〈担任の思い・見取り〉

- ・ したいと思ったことが実現できる喜びを、子どもに感じてほしい。
- ・ 保育者がさりげなく「なんでかな」と問いかけることで、子どもに気付いたり考えたり、試そうとしたりしてほしい。

〈他の保育者の気付き・見取り〉

- ・ コースづくりがうまくいかず何度も崩れるが、工夫しながらどんどんコースが変化していった。子どもが考え、道具を持ってくる姿があった。
- ・ コースづくり以外にも、ドングリの転がる音やドングリムシを見つけることなど、それぞれの気付きや楽しんでいることを友達に知らせている姿があった。
- ・ 少人数での関わりが出来てきて、言葉でのやりとりは多くはなくてもお互いに役割を果たしながら遊ぶ姿があった。
- ・ 4歳児にとって保育者の存在は大きく、必要に応じて一緒に遊びに入ったり見守ったりしながら、思いや気付きをつなげていくことが大切である。

《反省・評価》

園内研修のカンファレンスで、他の保育者から担任が気付いていなかったことや、援助、環境構成等を聞いたり話し合ったりしたことで、翌日からも意識して子どもと関わる事ができた。保育者が子どもの考えを引き出し思いをつなげていくことで、友達同士で意見を出したり試したりすることが増えた。自分のアイデアが実現していく楽しさを感じたことで、またしたいという思いをもち、翌日以降もコースづくりを楽しみ、ドングリ転がしの遊びが広がっていった。

5. 研究の成果

園内研修に加えて、ハートの日を定期的に行ったことで、子どもの姿を様々な視点から見取り、保育者の援助や環境構成について話し合うことができ、他クラス、他学年の子どもの姿や遊びの様子、担任の悩みなどを知る機会となった。他の保育者の考えや関わりを知り、自身の保育に活かすことができ、多面的に子どもを見る力や同僚性が高まったと感じる。また、保育について普段から保育者間で気軽に話すことが増え、保育者の考えも柔軟になってきたことによって、子ども達がより意欲的に遊ぼうとする姿につながってきている。他学年の姿や遊びにも興味をもつようになり、学年を超えた自然な交流も増えてきた。

6. 今後の課題

話し合いの日をもつことで保育者の意識が柔軟になり、子どもの姿にも変化が見られたので、来年度もハートの日を継続していく。環境構成の意図や今後の展開、悩んでいることなど話し合いのポイントを絞ることや、担任の関わりから変わってきた子どもの姿について共有していくことなど、話し合いの内容や方法を検討していく。保育者が考え合いながら保育を進めていくことで、子どものしなやかな姿につなげていきたい。